

人生・成熟へのヒント

[折り返し]からの幸福生活学
The Golden Leaves of Autumn

森村誠

Seichi Morimura

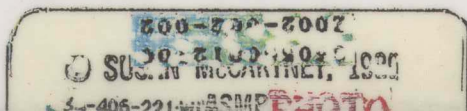


堀田力

Tsutomu Hotta

P H P

The Art of Getting the Most from Your Mature Years





P

H

P

<著者略歴>

堀田 力 (ほった・つとむ)

弁護士・さわやか福祉財団理事長。1934年、京都府生まれ。京都大学法学部卒業。大阪地検特捜部検事などを経て、1976年、東京地検特捜部検事。ロッキード事件では、田中角栄元首相らに論告求刑を行う。その後、法務大臣官房人事課長、最高検察庁検事、法務大臣官房長などを歴任。1991年に退職し、さわやか法律事務所、さわやか福祉推進センター(現・さわやか福祉財団)を開設。著書に『否認』(読売新聞社)、『再びの生きがい』(講談社)、『おごるな上司!』(日本経済新聞社)など。

森村 誠一 (もりむら・せいいち)

1933年、埼玉県熊谷市出身。青山学院大学英米文学科卒業後、ホテルマンとして働きながら執筆を始める。1969年、『高層の死角』で江戸川乱歩賞(第15回)、1972年、『腐蝕の構造』で日本推理作家協会賞(第26回)を受賞。著書に、『人間の証明』『悪魔の飽食』『忠臣蔵』『新選組』など代表作のほか、『「嗚呼、忠臣サラリーマン」考』(PHP文庫)など、ビジネスエッセイも精力的に執筆する。

人生・成熟へのヒント

——「折り返し」からの幸福生活学

1996年12月19日 第1版第1刷発行

著者——堀田力 森村誠一

発行者——江口克彦

発行所——PHP研究所

東京本部 東京都千代田区三番町3番地10 郵便番号102
電話03-3239-6256(第四出版部)／03-3239-6233(普及一部)
京都本部 京都市南区西九条北ノ内町11 郵便番号601
電話075-681-4431

印刷・製本——凸版印刷株式会社

©TSUTOMU HOTTA & SEIICHI MORIMURA 1996 Printed in Japan

ISBN4-569-55425-3

*落丁・乱丁本の場合はお取り替えます。

はじめに

堀田 力

風に飛ばされて、流れていく母の帽子を追う幼な子。あの『人間の証明』以来、私は森村誠一さんのファンである。

彼の小説には、人間が息づいていて、そのいとなみを見る作者の優しい眼差しがある。

たとえば、最新刊の『棟居刑事の複合遺恨』の締めめのせりふは、

棟居刑事「これからいくらでも立ち直れますよ」

ヒロイン「そうしますわ。愛を放棄しても人生を放棄したわけではありませんもの」というもの。作者は、ヒロインに優しい。

その森村さんと、人生を語った。

もちろん、難しい話ではない。ことを難しくしたり、気取って言ったりするのは森村さんに合わないし、私にも合わない。

それでも、森村さんが次々とすごい言葉を述べられるものだから、私は、ウームと圧倒され、共感し、うれしくなってしまう。

たとえば、

「個人の目的と会社の目的が、少しずれている異心円でも、相対的に見ると、お互いの円がかなりの面積で重なり合っている。この形が私はいいと思う」

「家族のために自分を犠牲にするという大義名分で、自分自身を駄目にしてはならない。それは結局、家族を口実にして自分の優柔不断を糊塗する場合が多い」

「若い頃というのは、目の前に見えている風景しか信用しない。だから、場所的には広がりがあり、分野的にも多様性があるが、時間の軸が現在という一点しかない」

「四十歳で『自分半史』を書けば、あとの四十年の人生が一味も二味も違ってくる」など、など。

「しまった。この言葉をもう二十年早く聞いていれば……」と悔しく思ったことも、

しばしば。

実際、私の中年時代までは、平均寿命が五十歳台から六十歳台であったから、定年になった後のことなど心配する必要はなく、それこそ、「会社と同心円」でやるのが勤めというものであった。人生だの生きがいだの、余計なことを考えるのは落ちこぼれの人くらいのものであって、多くの人にとっては、辞めた後、神に召されて天国か地獄へ行く前に、貰った退職金でどれだけ人生を楽しむかが勝負だったのである。

ところが、寿命はどんどん延びて、下手をすると働いた期間とそう変わらないくらいの期間が、退職後に残される時代になった。

そうになると、いやでも、これからの生き方を考えざるを得ない。

ところが、それを考え出すと、「まいったなア。もつと若いうちにこういうことを考えて、心掛けていればなア」という思いに突き当たる。

そういう思いを胸の底に秘めながら、森村さんの鮮やかな生き方をうかがい、それに触発されて、私の生き方についても、つい恥知らずに語ってしまった。

長い人生である。

しかし、終わるときは一瞬である。

その人生を輝かせるのは、自分しかない。

この本が、そのためにいささかなりとも役立って欲しいと願っている。森村さんも、同じ思いだからこそ、これだけ自分をさらけ出されたのであろう。

なお、本書は、P H P 研究所第四出版部の福島広司編集長と阿達真寿さんたちの思いつきと労働力とによって生み出された。感謝。

一九九六年十二月

人生・成熟へのヒント——目次

第二章 働きがいの再発見 — 会社、仕事、転職について

無数の「死」を想えば、いまを無為には過ごせない……………堀田	12
残り時間が少なくなる前に、第二の人生を設計したい……………森村	15
「自我のスルメ」人間でやってきた世代の意識改革……………堀田	18
ひたすら身を低くして就職した時代を振り返る……………森村	23
好きな「仕事」も、いつかは壁にぶつかる……………堀田	25
四十歳から五十歳が人生の正念場だ……………森村	28
忙しさに酔っているだけのビジネスマンは哀しい……………堀田	32
「異心円」で会社と接することが人生後半への飛躍……………森村	34
「私が主役である」——すべてはここから始まる……………堀田	38
組織から何を学ぶか、私が培った「人間観察力」……………森村	41
不本意な異動も自分の財産をつくるためと考える……………堀田	46

第二章

「知」の蓄えがモノをいう——歴史、読書、情報整理術

転職するには無責任になる覚悟がある……………森村 52

人間死ぬ心配はないと割り切ることも大事……………堀田 56

「歴史」に興味を持つと人生の彩りが増す……………森村 64

「歴史」を知ることと人間への愛惜の念が強くなる……………堀田 69

歴史を知らないことは異性を知らないことと同じ……………森村 72

まず、身近な生活圏の歴史を振り返る……………堀田 75

本を読む動機には三つのタイプがある……………森村 77

中高年こそ古典の名作を読むべし……………堀田 80

ベストセラーを読まないと落ち着かない……………森村 83

「問い」を持って本屋の書棚を眺めると本が呼応する……………堀田 85

ビジネスマンに勧めたい読書法……………森村 88

第三章

“私”の足跡を確かめる

「自分史」を書く

時代の流れを頭に入れて新聞を読む……………堀田 92

英字新聞を読むと意外な事実がわかる……………森村 94

テレビと上手につき合えば、発想が豊かになる……………堀田 96

三倍速ビデオを活用し、欲しい情報を素早く入手する……………森村 99

テレビの前の濡れ落ち葉になるな……………堀田 102

書くことで人生の骨組みを再構築する……………堀田 106

人生の折り返し点で自分史を書く効用……………森村 109

『おごるな上司ノ』は人事課長時代の自分史である……………堀田 112

問題意識を持つてテーマを絞って勉強すること……………森村 115

中高年よ、パソコンノイローゼになるなかれ……………堀田 119

文章が良く見えるワープロ。肉筆はごまかしがきかない……………森村 121

十四、五歳の記憶をたどり、当時の望みに挑戦……………堀田 124

肩書きなしの人づき合い

人間関係、社交術

老いを迎える前から地域とのつき合いを密にする……………森村

パーティーで味方をつくるアメリカ人を見習ってみる……………堀田

家から出て、人と知り合うことに精神的になろう……………森村 136

自分と社会との境界線をしっかり引きたい……………堀田 138

身内以外にきちんとした人間関係を築く……………森村 142

会社の人間関係は「和して同ぜず」でいく……………堀田 145

家族の絆はどこへ

子育て、夫婦、高齢化

六十歳からの人生は、定年十年前から備えたい……………森村 154

子供に美田を残すな、自分のために使いなさい……………堀田 157

十年後の社会を見つめる——教育とボランティアの将来

老いの道は、なだらかな坂道を下るイメージが大切……………森村

夫婦は、お互いに自分の時間があると長続きする……………堀田

老いても男と女。結婚という形式に縛られない……………森村

夫も社会の犠牲者であることへの理解を……………堀田

夫婦がもう一度、本気で目を見交わすこと……………森村

いま、人類史上最大の教育の危機に直面している……………堀田

社会を見直さなければ、親と子の自立はない……………森村

今日望み得る、いい親子関係はお互いの精神的援助……………堀田

できる範囲のボランティアから始めればよい……………森村

人には助け合う遺伝子があると確信した出来事……………堀田

あとがき……………森村 誠一

第一章

働きがいの再発見

会社、仕事、転職について

無数の「死」を想えば、いまを無為には過ごせない

やましい、という気がある。

「ああ、自分はあれほど人間が死んだ中で生き延びているんだ」

戦争であの人が死んだ。栄養失調であの人が死んだ。あの人が結核で死んだ。

まわりに人の死が数え切れないほどあった。

死の彼岸を渡らず、私はこうして生きている。

死と背中合わせに「生きる」という強烈な意識を持ち続けてきた私たちの世代だが、いまの若い人たちに、私たちと同じような「生きる」気配を感じることは少ない。

漠然と生きている「自分」はそれぞれにあるのだろうが、その「自分」がどう「生きる」のか、一度立ち止まって考えてみることも大切ではなからうか。

この、森村誠一さんのダイアログも、二十歳代、三十歳代の人には、そういう観点から読んでももらえたらいいと思っている。

また、四十歳代から五十歳代、さらに、私たちの世代の人は、自我を押し殺して会社とか組織の中で生きてきた。それゆえに組織を離れたら、自分自身がなくなってしまう恐れが十分に予想される。そのとき、この世代の人たちは、いったいどう自分を取り戻して、どう生きていくかという問題に直面する。

それぞれの背景によって、この本から受け取るメッセージも異なってくると思うが、私たちの知見してきたことが少しでも参考になればいいと書き進めていく。

私が中学校二年生のとき、校長が二年生全員を講堂に集めて、いかにすれば子供が生まれるのかを教えてくださいました。戦後すぐの性教育の直截ちよくせつさが私には驚きだった。

男と女の行為そのものも、そんなことするのか、と目をむいて聞いたが、さらに数億の精子のうちのたった一つが生命になるということ、この話は忘れられない。

「僕が生まれるために、そんなにたくさんさんのやつが死んでいるのか、生命とはそれほ

どすごいものなのか」

と、身のまわりに数多くの死を見ている私にとって、生まれることさえも無数の犠牲の上に成り立っているということを知り、本当に身体が震える思いであった。

精子もいっぱい生まれて、死んで、人間もいっぱい生まれて、戦争でいっぱい死んで、しかし、自分はこうして生きている。

思春期の私にとって、自分が生きている意味を問うことは、日々、切実な悩みだったのである。

そういう背景があって育ってきたから、自分の命があることのすごさをいまでも実感している。

「せっかく長らえた命だから、何か刻みつけておきたい。何とか無駄にはしたくない」

という気持ちがいつも胸の奥から湧き出てくるのである。